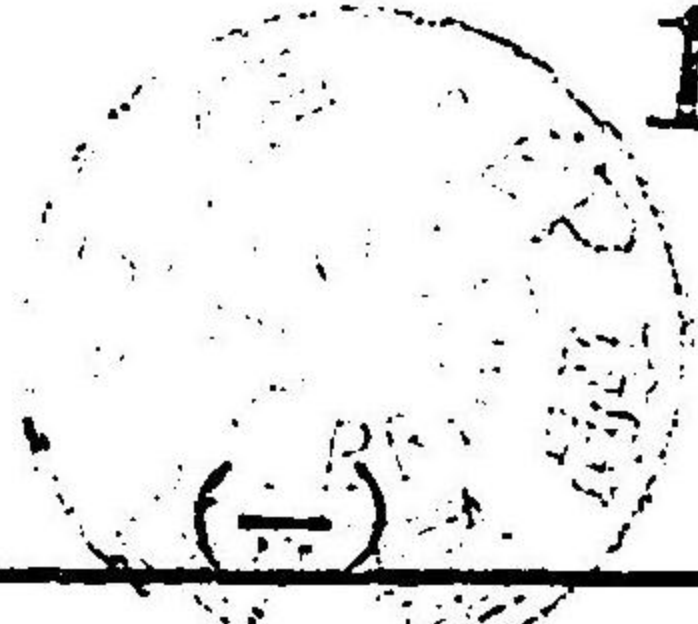


特52  
165



No 982

昆布を造る神

パウロの言に曰く夫人の見ることを得ざる神の永能と其神性とは造られたるものにより創世よりこのかたさとり得て明に見るべしと其言宜なるかな抑人の下等動物と異ものは何ぞや近江聖人は或る人に答へて掌の前にむかふものは人のみ之れ人の他の動物に異なる所なりと云ひしとかや之も一理あることなるべけれども最其區別の明なるものは人々固有の本心なり若し人様々の世の執着を離れて其本心に問ふときは常に萬有の大原因となるべき神を知るものなり下等動物に於ては決してこのことあらざるなり時としては生計の苦しさに晝夜心の休まる時なく本心の働を自から暗し全く神を念ふの心なき人もあれど夫は人たるものゝ常にはあらずして非常といふべし爰に其本心の働によりて神を知りパウロの言を証するに

020652-000-9

特52-165

昆布を造る神

三浦 徹/著

M21

ABI-0468





足るものあり朋友より聞るま、記して幼童諸君に告ぐ  
 余がキリスト教の友北海道の札幌を出て六七十里北方に行き  
 しが幌泉と云へる所より四里程にある一の寒村に宿泊せり此  
 村は實に遍鄙にして僅少の漁家あるのみ其村の前面は沙漠た  
 る大洋にして後は嵯峨たる山又山なり然ば此地に住ひする人  
 々は商業とててもろくく爲すことならず毎年海中に生ずる昆  
 布をとりて生活を爲すのみ之にひきかへ幌泉は魚米の地にて  
 戸數も多く商店もあり自から一市場を爲して繁華の地なり偕  
 余が友は此村の旅舎に着し滞留すること三日餘折しも安息日  
 になりたれば終日此家にとゞまり教理を談ずべき兄弟もなく  
 徒然のあまり一人なりとも友を得て教のことを語りきかせた  
 きものなりと迫切に神の恩を祈しが夕飯を食し終りし頃此家  
 の老婆なるべし烟管烟草入を手にさげて客室に入り來り四方

八方の話する折しも余友にむかひ徐に云ふや實に世の中は  
 不思議のものなり妾は固越後に生れしものなるが此地に來り  
 て住ひしより已に三十七年の星霜を経たり其間毎年々々八月  
 に至れば必ず此前の海中に昆布を生ず此地の人々は皆此昆布  
 をとりて生活するものなるが茲に於て考るに此昆布が毎年々  
 々相かはらず海中に生じて時を過またぬは決して人爲にあら  
 ず或る人は之を自然と云ふめれど妾は決して然思ひはべらず  
 必ず之を造るものありて斯く生ずるものなり客人は未だ年少  
 に見いたたまふが此昆布を造るものを知りて過失にな蹈りたま  
 ひず之より西に幌泉と云へる所ありて随分に繁昌する地なれ  
 ど繁昌する程にいろくわろきものもありて若年の人々はか  
 せぎためたる金錢を皆此幌泉にてつかひ果し數年の辛苦も一  
 朝の歡樂ととりかへて人には嫌はれ親族には疎まれ甚しきに



(四)

至りては身を亡ぼして終るものもありとなん此昆布を造るものを知るときは過失又蹈ることを免るべし又一も話まうすべきことごとくあれ凡世の人たるものは貴賤賢愚の差別なくいと貴き靈魂と云ふものあり客人は能く知りたまふやいなや決して消滅するものならず此身軀は年老て死果るとも靈魂は永遠も活て亡ぶことなし人又此靈魂が永遠も活るものなることを知らば身を持崩すこともなくいと幸福の人とぞならぬ客人よ能く靈魂のことを思ひて過失に蹈ることのなからんやう力め玉へと懇に語りきかせたり余友は此老人が昆布を造るものといひ又靈魂の不滅のことなど長々と説き聞かせたるを不思議に思ひ其云ふ所はキリスト教徒が常に云ふ所によく似たり彼れ必ずキリスト教徒にあらざりせば道をよく聞たるものなるべし問ひ試みばやと老婆にむかひ汝はイエス教をきこしこと

(五)

ありやと問ふに老婆は驚きいな彼の教は危きものなり忘れても聞きたまひずと茲に於て信徒はますく奇異の思を爲し彼の口上にて推量ればイエス教徒にあらざるべし不思議のこともあるものかなと老婆に汝は元來何宗なりやと問ふに妾の家は代々眞宗なれども妾は決して眞宗を信ずるものにあらず然ば汝の罪あることを知り玉ふか然り妾は罪深きを知るなり殊に婦人の男子とちがひ罪深きものと聞く幼きより我身に罪あるを知りて内心兎角穩ならず如何にしてか此罪を消さばやと千々に心の碎ども松吹く風と磯によする浪の音のみ友とせる鄙にしあれば我ために嚮導する人もなく已を得ざれば時々南無阿彌陀佛を稱れども凡南無阿彌陀佛と云ふものは數多しとて益あるものにあらず我國に佛名を稱るものは多く又其職にある僧侶の如きも少なからぬと眞誠の南無阿彌陀佛



を稱するものは一人としてあることなし唯我國に眞誠に之を稱するものゝ二人あるを知るのみ凡佛名を稱へんとならば夜中人なき深山に入り世に執着の念を去り二三時間も黙念して而して初めて稱ふべし去りとて多く稱ふべきにあらず眞誠のものは唯一回にしてこと足なん妾も眞誠に稱んと思へどいまだ稱へ得ずと余友はきゝてますく訝り然ば其南無阿彌陀佛を眞誠に稱ふれば夫にて罪は赦さるゝかと問へばいなとよ決して然らず他に求むべき術なければ已ことを得ず稱へんと思ふのみと茲に於て余友は此老婆が救を求め安心を得んとしていまだ得ざるものなることを知りキリスト教を教ふべきは此時なりと思ひたれば夫より昆布を造る神の性靈魂の不滅よりキリストの贖罪罪を消さるゝの術など残るくまなく語りきかせ凡三時間ほど話したるに老婆は聞つゝ頻に感じて膝の進むを覺

ぬぬまでに或は悦び或はかなしみ或は笑ひ或はなき聞終りて雀躍し且云ふやう妾此地に來りしより久しき年を経たる甲斐に多の人を宿せしかども未だ一度も是の如き良き客を宿せしことなし時たま人が語るをきくにヤソ教は國に害あり人倫を亂すとのみきゝたれを只管眞實と思ひしに彼と此とは反對にて今こりヤソ教の善良き教なることを知れり何故に今まで之を知ざりしかと頻に後悔し又悦びいで是よりは客人の深き好意に報いんと其場をたちしが暫くして祭文讀を連來り辭するもきかず二時間ばかり語らせてきかせしが彼地は物價の高直ゆゑに普通の祭文讀は一時間二圓ぐらゐなり然ば此老婆は生命の返禮に五圓程を費したるなるべし余が友は神の恩によりて十分に安息日を守り且祈りし如く適當なる友をたまひて獨旅の酔を慰めたまひしを感謝せりと云ふ斯てあるべきならね



心登朝出立することに決せしに老婆は名残を惜み再び此地を  
 過りたまはゞ是非とも一二夜止りて生命の道を聞かせてよと  
 頼まれて立去りしは今より一年まへなるが今年に再び彼地に  
 至れを尋ねて見んと語りたり  
 嗚呼此老婆は何ものなるや昆布を見て神を知り又靈魂の不滅  
 を知る固より無學文盲の老人なるに教へられずして自から悟  
 り聞かずして自から知る是其本心の働によるものにして凡人  
 たるもの皆此本心あらざるなし然るを世の生計又淺薄の學問  
 にさまたげられ自から本心をくらまして己れ神を知らざるの  
 みならず人をして神を知らざらしめんとし世をして魔界に陥  
 いらしめんとするものあり是の如く本心をくらますものは何  
 ぞや罪なり嗚呼罪は恐るべし

明治廿一年四月十七日印刷  
 明治廿一年四月廿三日出版

著作者兼  
發行者

三浦徹

東京日本橋區麴町  
一丁目四番地寄留

印刷者

製紙分社

廣瀨安七

東京日本橋區  
兜町一番地

